

漢方医学が得意とする婦人科症状：その発症メカニズムと治療効果(2)

肩こり

濱口 眞輔

Summary

肩こりは、姿勢不良、運動不足、過労、寒冷、精神的緊張などで発症し、身体的要因に加えて心理的、社会的要因が複雑に関与している。東洋医学的には外因(風寒、風湿、寒湿)と、内因および不内外因(気滞、気逆、気虚、瘀血、血虚)が原因となり、風寒は葛根湯、寒湿には葛根加朮附湯、風湿には麻杏薏甘湯、気滞や気逆には柴胡剤や理気剤、気虚には補気剤、瘀血には駆瘀血剤、血虚には補血剤を選択する。

患者の発症機転と受診時の状態を評価して、適切な方剤を選択することが重要である。

Key words

肩こり

頸部痛

外傷性頸部症候群

はじめに

肩こりは更年期障害や月経困難症の随伴症状としても多くみられ、鎮痛薬、筋弛緩薬の内服や理学療法が必要に応じて行われるが、漢方薬も肩こりの軽減に有用である¹⁾。本稿では、肩こりに対する漢方治療について、漢方治療にあまりなじみのない読者の日々の診療にも役立てられるように留意して概説する。

肩こりの病態

1. 西洋医学的な考え方

肩こりは自覚的な「こり感」と、他覚的に「筋の異常な緊張、圧痛、しこり」が確認できる病態と定義される²⁾。その基盤には頸椎や肩の機能障害が存在し、肩の機能障害としては動揺肩、先天性の解剖学的形態異常として「なで肩」や胸郭出口症候群が挙げられる。そこに増悪因子として姿勢不良、運動不足、過労、寒冷、精神的緊張などが加わり、支持組織である僧帽筋に負荷がかかって疼痛が生じる³⁾。すなわち、肩こりは身体的要因に加えて心理社会的要因が関与し、痛みが生じる⁴⁾。

2. 漢方医学的な考え方

漢方医学的な病気の原因は外因、内因、不内外因の3つに分けられる。外的因子(外因)には風、寒、暑、湿、燥、火の環境変化(六気)があり、この変化に身体が適応できない場合に疾患を発病す

Shinsuke Hamaguchi

獨協医科大学医学部麻酔科学講座主任教授